呼応の真宗学

安冨信哉

はじめに

今から三十二年前の一九七六（昭和五一）年一〇月二〇日未明、金子大榮先生は、九十五年の長い世寿を終えて示寂された。ご葬儀は、一〇月二二日、下鴨法泉寺にて、多数の参列者を迎え、しめやかにとり行われた。

数えてみれば、本年は、先生の三十三回忌の年にあたる。金子先生は、真宗教学の探究一筋のために、その九十五年の生涯を捧げられた。岩波文庫の『教行信証』と『歎異抄』は、先生が校訂し、註を付されたものである。私が真宗学に関心をもって最初に手にとったのも、金子先生のそれらの本である。一九六七（昭和四二）年、大谷大学大学院修士課程に入学し、真宗学を専攻した私は、先生の大学院での特別講義を拝聴することができた。墨染めの衣を着て、教室でたん〳〵とお話される姿が記憶に残る。当時は、曽我量深先生も健在で、曽我・金子両先生の講義は、学生だけでなく、多くの教員、学外の方々も聴講した。また金子先生の最晩年には、私は、先輩や同僚と下鴨のご自宅で、お話を聞く機会を得た。改めて学恩の深きことを想わずにはいられない。

一、善知識

先生は、一八八一（明治一四）年、一月三日（戸籍上は、五月三日）、新潟県高田（現上越市）の最賢寺にお生まれになった[1]。先生のご一生は、けっして平坦なものではなかった。若い頃には病弱で、いつも死を覚悟されたとのことであり、また大谷大学の教壇に立たれてからは、あの歴史的な「異安心」事件の渦中に身を投じて、しばらく宗門から追われる羽目になった。

かえりみれば苦難の多い一生であった。どうして越えて来たか解らない幾山河である。自分には自分のものでない力が働いているようである。その力は父祖の念願か近親の護持か。「この身私有にあらず」と感ぜしめられた時もあった。その時には多くの人縁・法縁の加被を思わしめられたことである。

されどその惣べてを含めて業力というべきであろうか。

（『聞思室日記　続々』コマ文庫、一〇六頁）

と先生は回想しておられる。

その出発には、先生の真宗大学での学びがある。承知のように、真宗大学初代学長の清沢満之先生は、真宗大学開校にあたって、

本学は他の学校とは異りまして宗教学校なること殊に仏教の中に於て浄土真宗の学場であります　即ち我々が信奉する本願他力の宗義に基きまして我々に於て最大事件なる自己の信念の確立の上に其信仰を他に伝へる即ち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが本学の特質であります

（「真宗大学開校の辞」・『清沢満之全集』岩波書店、第七巻、二六四頁）

と述べている。真宗大学は、いわゆる近代的なアカデミズムを柱として、世に有為な人材を輩出することを主眼とする「他の学校」とは異なり、「自己の信念の確立の上に其信仰を他に伝へる」「自信教人信の誠を尽すべき人物」を養

成する「浄土真宗の学場」であると言い切っている。

もちろん大学は、学問の府であるから、そこに知的な活動が重視されることは申すまでもないが、真宗大学は、一般的な学問の精神、知的要求の満足をもっては尽せない根源的な「学びの場」であることを、清沢先生は期待したのである。

寺川俊昭氏は、清沢満之が真宗大学に対して、

直ちに親鸞に直参し、親鸞に学び、そして親鸞の精神に生きようとの明確な姿勢を、大学の志願として表明した。

と述べておられる[2]。つまり清沢先生は、大学の構成員の一人ひとりが、親鸞聖人のあの強烈な求道精神、学仏道の精神の中に生きることを願ったのである。

大学の存立基盤であるその学道の精神を若き金子大榮先生は吸収した。金子先生は、清沢先生から直接警策を受けるということはなかったのであるが、真宗大学で先生の謦咳に接することができたと述懐されている。とりわけ清沢先生の没後、浩々洞の人々と信仰の交わりを深め、一九一五（大正四）年五月から、暁烏敏先生の後任として、二年間、『精神界』の編集主任を担当したが、そのことは、先生を清沢門下として位置づける大きな契機となった。

このことと同時に、金子先生のご生涯において、曽我量深先生との交流は最も大きな出来事であった。曽我先生なくして、金子先生の歩みはなかったと思われる。

曽我先生と私は同じ北国、越後でありまするが、先生と知り合いになりましてからは、もう六十年以上になります。もっと言えば、大学の学生時代からですから、まあ七十年といってもいいわけであります。その学生時代では、先生と私とは五年違いで、先生は研究科、私は本科一年というようなことでありました。そして、その頃から曽我先生は兄さんであり、私は弟である、という気持ちもずっと続いておるのであります。それがずっと後になりますと、私は曽我先生と言わねばならないほどいろいろと御教化にあづかったのであります。そういうよ

うなことで、亡くなられまして今もなお、何か寂しい頼りないような感じがするのであります。

（「昇道無窮極」・『親鸞教学』二〇号、一頁）

金子先生は、曽我先生を追悼したある講話で、このように振り返っておられる。七十年の交流というのは、普通の人間同士の交際には、兄弟でもないかぎり考えられないことである。しかもそれは、単なる社交上の交わりではなくて、信仰上・思想上の交わりである。往復書簡の記録である『両眼人』を拝読すれば明らかなように、お二人の交わりの中には、私たちの想像もつかないような厳しい面もあったのではないかと窺われる。

ご承知のように、金子先生の著作の出発となったのは、一九一三（大正二）年に発行された『真宗の教義と其歴史』である。本書は、真宗の思想を新しい表現をもって著した記念碑的な著作と後代評価されているが、その金子先生の処女作の序文を執筆しておられるのが曽我先生である。その筆致は見事であるが、また曽我先生の言説には厳しい策励がある。

金子先生は、生涯、曽我先生を兄として慕い、また曽我先生は、金子先生に対して、弟を見るようなまなざしをもって接していかれた。金子先生の教学を特徴づけるのは「聞思」ということに尽きようが、それは、曽我先生という先輩をもたれたことと深い関係がある。金子先生の教学は、一面、曽我先生への応答であると思われる。

二、『光輪鈔』

清沢満之師に命名された「精神主義」の主張は「宗教は自覚の上にある」という一点にあるが、金子先生もまた主体的自覚をその教学の基礎におかれている。先生は、かつて『浄土の観念』（一九二五）を著わし、浄土は、宗教的自覚の上に開かれる世界であるとして、実体的な浄土観を否定し、それが宗門からは異安心と断定されて、大学を追われるという結末を招いた。それは、実体化された浄土を実相として領解しようとしたことにある。

先生の絶筆『光輪鈔』は、はじめに「一如の実相」と掲げられ、実体的な仏教観を批判している。先生が示寂する三ヶ月前に執筆された本稿は、私にとっても想い出深き作品である。先生は、病の床の上に、小さな机を置いて本稿を墨書し、「これがもう最後だ。身体がいうことをきかぬ」と仰られ、『親鸞教学』の編集に携わっていた私たちに、その原稿を手渡された。

『光輪鈔』は、「上　一如の実相」、「中　対応の行信」、「下　光輪の道理」からなるが、本稿において示唆されることは多い。そのひとつは、「中　対応の行信」で、近代の教学の伝統を、対応―感応―呼応の上にみておられることである。まず、

満之先生は宗教とは有限と無限との対応であると道破せられた。有限より見れば無限は有限の外にあり、無限より見れば有限は無限の内にある。これは対応ということである。しかればその対応とは、即ち相応ということであろう。

その相応とは、即ち『論註』に如来は是れ実相身なり、是れ為物身なりと知ることであると解説せられてある。（中略）その相応は対応である。有限より見れば無限は有限の外にあり、無限より見れば有限は無限の内にあるといわれる。それが相応としての対応である。

（『光輪鈔』・『親鸞教学』二九号、二～三頁）

と押えておられる。

清沢師は、

宗教の要は此の（主伴互具の）関係を覚了せしむるにあり　是れ有限の無限に対向する所以なり

（『宗教哲学骸骨』第二章「有限無限」・『清沢満之全集』岩波書店、第一巻、一一頁）

と述べる。西洋人の宗教定義を尋ねる中、おそらく英語の correspondence を受けとめる過程で、腑に落ちる訳語が見出せず、ひとまず「対向」という語を当てたのであろう。この対向を、金子先生は、現代語に置き換えて「対応」

といっている。対向、すなわち対応の思想は、その絶筆『我信念』に至るまで、清沢先生の宗教観の根本基想として生涯一貫している。

金子先生は、清沢師が対応の思想に立っておられることを確認したあと、つぎに、

しかるにその相応は即ち感応であらねばならぬ。それは特に量深先生に依りて強調せられているように思われる。それは二種深信の体験ともいうべきものであろう。〃自身を信ず〃乃至〃信を超えて願に帰す〃というようなことは、すべて感応せられたものではないか。しかるにその法機の深信は一度は逆対応といわれたものであった。されど対応に順逆はない。「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」それこそ感応として直接なる対応ではないか。

聖徳太子に依れば〃もし機、感ずることあれば応きわまりなし〃と道破せられてある。しかれば対応に正逆あるのではない。ただ感応あるのみである。（『光輪鈔』・『親鸞教学』二九号、三頁）

と述べ、曽我量深師の立場が感応の思想にあると指摘されている。曽我先生がいつ頃から感応の語を重用されたかは分からないが、一九四一（昭和一六）年五月三日、四日の両日に渡り、京都の華頂会館で催された金子先生の「還暦感謝の会」で、曽我先生が、

抑も仏教とは何ぞや、と言へば、恐らくは是感応道交といふ一語で尽きるのではないか。これより外に何もないのではないか。感応道交といふことが本当に分つたならば、それで仏教全体が分つたと言つても差支ないのぢやないか。仏教の綱要は感応道交にあり（「感応道交」・『曽我量深選集』弥生書房、第十一巻、八一～三頁）

と述べられたのが想起される。曽我先生は、清沢先生が対応と表明した仏教の思想を、終始、「感応」という実感、感動の場を離れずに説き明かしつづけた。

この曽我先生の感応の指教を承けて、金子先生は、

こうして対応は感応であることが明らかにせられた。しかるにその感応を成立せしめるものこそ、呼応ともいうべきものではないか。本願に感応せしめるものは、その本願は招喚の声であるからである。真実の教は本願を宗とし、名号を体とすといわれている。その体とは法であり、宣せであり招喚の勅命といわれている。しかれば感応というもその勅命を感じ、それに応答するの外ないであろう。こうして如来と衆生との対応は相応感応呼応として身心に行証されていくのである。

（『光輪鈔』・『親鸞教学』二九号、三頁）

と結んでおられる。ここに清沢先生の対応を基軸として、相応（曇鸞）、感応（曽我）、呼応（金子）の真宗の伝統が確かめられる。清沢・曽我の伝統を承けた金子先生の呼応の立場について、寺田正勝氏は、

二師に対して金子先生は常に「何故に」と問う。何故に対応や感応ということが我が身の上に成り立つのかと問う。先生はそれらの事実の根底に「呼応」という本願の「道理」があるからだといわれるのである。

と指摘される。[3] 対応ということも感応ということも、本願招喚の呼びかけに応答するという事実の他にはない。金子先生の生涯を尽した真宗の学びは、それ自身が、呼応として、身心に行証されることであった。

三、表現の方式——自己を通す

金子先生の著述を拝読してまず注意されることは、卓越した文章表現である。文章から与えられる印象は、その人の趣好によることが大きいが、慈味あふれる先生の文章に惹かれる人は少なくないであろう。先生の出世作となった『真宗の教義及び其歴史』あるいは『仏教概論』は、とても若い頃の筆になるとは思えない風格を感じさせる。仏教書や宗学の書といえば、いかにも古色蒼然たる印象を与えた時代にあって、新しい文体で著された金子先生の著作が出版されたのである。仏教や真宗に関心がある当時の、とりわけ若い人々にあって、金子先生の文章は大きな衝撃であったろう。先生の書かれたものと講録もしくは近世宗学の伝統の中で生きている講学者の文章と較べてみれば、そ

の違いは一目瞭然である。かつて安田理深先生は、ご自分が京都に出て、仏教を学ぼうと志したのは、金子先生の『仏教概論』の新鮮な文章表現に魅了されたからだ、と述懐されたことがある。それも成程と頷かれる。

それに加えて、金子先生の講義を想い起こすとき、私は先生の口調を忘れることができない。先生は、一語々々噛みしめるような調子で語り、その声は、どこか念仏者の体温を感じさせるような暖かみがあった。それはすべて、先生の身体を通過して出てきた言葉であった。言葉の調子に、先生の人柄がにじみでているようであった。曽我先生が「でありましょう」と語尾をはっきり言い切るのに対して、金子先生は「ではないであろうか」と余韻を残された。そこに金子先生の味わいがあった。

かつて例の「異安心」事件が起こったとき、住田智見氏は、金子先生に対して、「あなたは困ったことが一つある。それは自分を通さないことは、何一ついわないということがいかん」というようにたしなめられたということである。(4)

しかし「自己を通してものをいう」というこの姿勢に、清沢門下としての金子先生の面目があり、思考方式があるように思われる。

> 私はこの自己を通して仏法を考へるといふことを、清沢式洗礼といひ、満之式訓練と呼んでゐる。（中略）私は常にその満之式訓練をうけたることに於て喜びを感ずるものである　（『くずかご』文栄堂、八七～八頁）

真宗学を学び始めた頃、私は、よく先輩から「自己を通してものを言え」と注意されたが、「自己を通す」ということが、金子先生が私たちに教えられた真宗学の基本的態度であると、改めて想われる。

四、真言と解釈

私は、金子先生の学風が、「自己を通した」ものであり、そこに真宗学における「人（にん）」の回復があったことを確かめたいのである。

金子先生の残されたお仕事のひとつに、真宗学の方法の探求があげられる。真宗には教学の伝統があり、江戸時代には宗学がほぼ完成した。しかし明治に入って、西洋から近代の学問方法が導入されると、古い形の宗学は、近代の批判にさらされることになった。はたして宗学は、近代の学として認められるのかどうか。このことが大きな問題となったのである。

このような問いかけが特に切実になったのは、大谷大学が文部省令によって国家公認の大学となったときであった。佐々木月樵・大谷大学第三代学長は、「真宗学と人文科の名は、大正七年初めて本学々科及びその課程に使用した所の新名目である。（中略）今後、益々学としてその研究が深めらるゝと同時に、またそれが学内のみならず、宗教として世間一般の宗教的人格教養の源泉となり得ることを深く切望して止まぬものである。」（「大谷大学樹立の精神」）と言明した。そしてあたかもこれらに応えるような形で、金子先生は、一九二二（大正一一）年に、「真宗学序説」と題して講演された。この講演は、古い宗学が新しく真宗学という名称で学界に登場する機縁となったものである。

真宗学の性格を、これほど明瞭に打ち出した論説は、これ以後もないのではないだろうか。先生は、この講演の中で、真宗学の対象と方法について次のように述べておられる。

真宗の学問の対象は、大聖の真言である。大聖の真言ということは、つまり、釈尊の言葉ということであって、この大聖の真言という言葉は親鸞聖人の『教行信証』のなかに出てくる言葉である。すなわち『教行信証』の「行巻」に大聖の真言、大祖の解釈という言葉がある。この『教行信証』の大聖の真言というのは、すなわち、真宗の学問の対象で、大祖の解釈というのは、すなわち、真宗の学問の方法である。かようにまづ大体を見当づけておく。『教行信証』を見ると、始めに「教巻」真実の教というものが出してある。『教行信証』全体を見ても、釈尊の教というものはずっとゆきわたっておって、それに対して七高僧の解釈が引いてある。すなわち、大聖の真言と大祖の解釈を外にして、親鸞聖人の『教行信証』はないように思われる。そこで、まづ対象を大聖の真言、

即ち、真実の言葉と定める。具体的に言えば、真実の教、『大無量寿経』である。七高僧の解釈は真宗学問の方法である、こういわんと欲するのである。

（『真宗学序説』文栄堂、一八～九頁）

申し上げるまでもなく、大聖の真言・大祖の解釈の語は、『教行信証』「行巻」偈前の文（『聖典』二〇三頁）に出てくることばであるが、この金子先生の指摘ほど、真宗学の対象と方法を適切に見定めた学問論は他にないであろう。

真宗研究には、科学的研究あり、人文学的研究あり、歴史的研究あり、と多様であるが、真宗学は規範的研究であることを改めて確認したと思われる。すなわち、真宗学は、教理学でも、訓詁学でも、歴史学でもないのだということである。(5)

学問が真理を対象とするのだとすれば、真宗学は、どのような真理を対象とするのであろうか。その真理は、科学的真理でも客観的真理でもなく、宗教的真理、すなわち親鸞によって真実教と選ばれた「大聖の真言」を対象とするといわれる。すなわち真宗学は、「大聖の真言」を究極的真理とするのであるという。ここに諸学とはちがった「純粋真宗学」（『真宗学序説』三三頁）の内実がある。この対象論は、まったく当然な見解であるとともに、驚くほど適切であると思われる。

つぎに真宗学の方法について、先生は、「大祖の解釈」であるといわれる。ここに学としての真宗学の方法が述べられるが、「大祖の解釈」が方法であるというのは、了解しにくい。真宗学の研究主体が私たちである以上、「大祖の解釈」というよりも、私たち自身が解釈の主体でなければならないのではないだろうか。おそらく先生は、真宗学の方法論の規範的な先蹤として、「大祖の解釈」とおっしゃったのであろう。いずれにしても、ここに解釈が、方法論として提示されたのである。

解釈というと、いかにも消極的方法のように思われるが、しかし解釈の重要性を私は、とくに最近痛感する。(6) 西洋では、解釈学は、ひとつの独立した学問領域になっている。シュライエルマッハやディルタイによって提唱された近

代の解釈学は、現代に至って、ガダマーやリクールなどの哲学者によって再び脚光を浴びている。

ヨーロッパの思想界に流布する解釈学は、ギリシアの古典解釈学やキリスト教の聖書解釈学の伝統に発祥することはもちろんだが、おそらくそのような近代の学問の伝統を念頭に置きながら、金子先生は、『教行信証』の教言から、真宗学の方法を「大祖の解釈」と言い切られた。そこに大きな意義のあることを思わずにはいられない。

五、聞思の道

金子先生の真宗学の方法は、より直接的には、「聞思」の二字に象徴される。聞思という概念は、親鸞聖人が、

誠なるかなや、摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。

（『教行信証』総序・『聖典』一五〇頁）

と勧励し、『教行信証』「信巻」「化身土巻」で、『涅槃経』を引用してその語義を確かめたことに淵源する。この聞思の語は、先生が生涯において最も親しまれたことばのひとつである。先生のご法名は、聞思院釈大榮である。この諡（おくりな）は、もともと先生が望まれたところではないかと窺われる。また先生は、その書斎を聞思室と呼び、その最後のご著書を『聞思室日記』と題された。

このように先生は、聞思の二字を自らの学問、あるいは精神生活の指標とされたが、この聞思は先生の学風を最もよく特徴づけているように思われる。ここに精神主義の内観思惟の方法は、聞思として受け継がれ、先生の呼応の教学の基礎となっている。先生の『歎異抄聞思録』や『正像末和讃聞思録』などは、先生の学問の性格を端的に表現している。

先生は、大谷大学の教壇に立って以来、仏教、そして真宗を説くことは、聞く以外にはないのだと悟り、ここに真宗の道があると思いさだめたといわれる。

いつか悟れる法説くは
聴く人に聞く外なきを
学徒はすでに師友にて
同行すなはち善親友

聞思の道は広くして
わが行くところにわれらあり
聞思の道は深くして
われらの法はわれの道

（「聞思」『くずかご』一二五頁）

先生は、聞思が真宗の道であると強調し、ある場合には、真宗は声聞道であるとまで述べている。声聞は、大乗仏教では嫌われる存在であるが、「声聞無数の願」（第十四願）が象徴するように、『大無量寿経』においては、声聞は浄土の聖衆に数えられる。金子先生は、声聞自利の道を徹底していくところに、おのずから菩薩道が開かれてくるのであるとおっしゃっている。

おわりに

現在、大谷大学の正門と北門には、掲示板のなかにいつも先哲の言葉が掲げられている。伝道のためというより、いわば仏教の大学としての自己確認のためにこのように掲示されているのであろう。ある夏、金子先生の言葉が掲げられていた。その内容は、いまはっきりとは思い出せないのであるが、

仏教の学は信に依りて解を求め

解に依りて信を満すものである

（『教行信証の研究』・『金子大榮著作集』春秋社、第九巻、一七〇頁）

であったと思う。この言葉は、先生がかつて『仏教概論』（一九一九年刊）のなかで引用した

信ありて解なきは無明を長じ
解ありて信なきは邪見を増す

（澄観『三聖円融観』）

に由来して、先生が創作された言葉であろう。一般に信仰というと、理性を否定して、不合理なことを信ずることのように思われるが、仏教の信はそうではないのだ、と。どこまでも道理を頷き、その頷きのなかから、疑うことのできない信というものを獲得するのだということであろう。ここに、信仰と理解の両者の円環的な関係が説かれている。

そして金子先生ご自身の生涯が、けっして止まることのない信仰と理解の円環運動のなかに尽されていったことを想う。またここに人生を燃焼し尽されたと拝察される。

一九七一（昭和四六）年九月一〇日、私は、学友の蒲池義秀氏と先生のお宅にお話を聞きに伺った。先生は、九十歳を過ぎておられ、身体も少しご不自由ではなかったかと思い出されるが、私たち若輩を暖かくお座敷に招じ入れて下さった。私は、真宗学に中々近づけずに、いつも信仰と疑惑の間に揺れていたのであったが、これについて先生に率直にお尋ねしたら、さきの「信ありて解なきは無明を長じ、解ありて信なきは邪見を増す」という古語を引いて、懇切にお答え下さった。私は、自分のモヤモヤが立ちどころに氷解したような気がして、足どりも軽く、先生のお宅を辞去したのであった。まことに先生は、信と解の円満した仏者であられたと振り返られる。

註

(1) 金子大榮先生の人と思想については、先学によるいくつかの解説がある。紙数の制約上、本稿で触れることはできなかったが、その代表的なものを二、三挙げておきたい。菊村紀彦『金子大榮―人と思想』読売新聞社（一九七五年、『親鸞教学』三〇

号〈追悼金子大榮先生〉大谷大学真宗学会 一九七七年、加藤弁三郎『念仏者 金子大榮』コマ文庫 在家仏教協会 一九七八年、幡谷明・龍溪章雄「金子大榮」『鈴木大拙 曽我量深 金子大榮』・『浄土仏教の思想』一五 講談社 一九九二。

(2) 寺川俊昭『清沢満之論』文栄堂一九七三年一一七頁。

(3) 寺山正勝「追慕 金子大榮先生」『親鸞教学』三〇号二〇頁。

(4) 清沢満之先生に学ぶ会編『清沢先生の世界』文明堂一九七五年九頁。

(5) 氣多雅子「何のための真宗学か」『真宗と言葉』教学研究所ブックレットNo.9本願寺出版社二〇〇三年。本稿において、氣多氏は、ヨアヒム・ワッハによって、宗教学を、規範的研究と記述的研究の二つに分け、真宗学の成立基盤について論考されている。真宗学の最近の数少ない学問論として注目される。

(6) 解釈を超えて実践へという方向は、若き求道者によって推求されている。参照、広瀬明『若き求道者の日記』弥生書房。広瀬氏は、真宗学を㈠偶像的真宗学、㈡宗教学的真宗学、㈢親鸞的真宗学、に分類し、第三の立場について、「われわれは表現された文字につまずいてはならぬ。その意味でわれわれは、これまでの真宗学を飛びこえて進まねばならぬ」といわれる。ここには、訓詁注釈を軸とする旧来の宗学を批判し、解釈を超えるという展望がある。私は、この氏の見解を是とする。しかしそれは解釈をくぐることを経ての事態であると思う。